



# 大すきいっぱい土の子

～学びづくり、くらしづくり、仲間づくり～

令和4年10月4日  
土井首小学校  
文責：校長 江原芳樹  
第9号

「春秋の争い」は、古今和歌集の時代より行われていたそうです。春がいいのか、秋がいいのか、それぞれ感じるころは異なるのですが、暑い夏が終わり、朝晩の涼しさを感じるようになると、やはり「秋はいいな。」と思います。

また、「花野」という言葉は秋の季語です。花のイメージは春が強いのですが、花の種類は圧倒的に秋が多いのだそうです。春の花は、一斉に咲き、また桜や菜の花など一個体につく花の多さが目立ち、色も鮮やかであることが、「春＝花のイメージ」となるのでしょうか。それに対し、秋の花は小ぶりで色も薄めの紫などが多いようです。さらに、秋桜のように主張できる花は珍しく、葉の影でひっそりと咲く小さな花が多いのだとか。

それでも、そうした秋の花の多さに気づき、「花野」という言葉をあてた日本人の感性は見事です。

十月になりました。「〇〇の秋」と言われるように、様々な活動に適した季節です。秋という季節を感じながら、充実の秋をめざしたいと考えています。

## 目標をもって活動すること

9月7～9日は5年生の野外宿泊学習、9月12～13日（当初の予定は9月5～6日でしたが台風接近のため延期）は6年生の修学旅行でした。どちらも泊を伴う活動のため、新型コロナウイルス感染症対策を一層講じての活動でした。

5年生の野外宿泊学習は、台風一過でまさに秋晴れの3日間でした。台風通過後のため、トレッキングでは足場の悪さに、多くの子どもたちが苦労しましたが、この「苦労」が子どもたちをたくましく成長させました。仲間と声をかけあって、遅れる仲間を励まして、あきらめかける心と闘いながら歩いた道のりは、学校生活では体験することのできないものです。



登り切った達成感の5年生

6年生の修学旅行は、2年ぶりに県外の実施ができました。秋の気配が深まる阿蘇で、自然の雄大さを体感しました。熊本地震から復興しようと奮闘する地域の方との触れ合いも、子どもたちの学びとなりました。楽しさの中にも規律をもって行動する姿は、土井首小学校のリーダーらしい姿でした。



阿蘇の大自然で乗馬する6年生

「活動が人を育てる」と言いますが、野外宿泊でも修学旅行でも、集団を通じた活動で子どもたちは確かに成長しました。学校の学習を中心とした生活だけでなく、こうした体験的な活動が子どもたちの育成に不可欠であることを確認した9月でした。

## お願い

「車による学校敷地内までの送迎」についてのお願いです。

土井首小学校では、特別な事情がある場合や、子どもの心身の支援に必要な場合など、車による送迎が必要であるときを除き、基本的に車による送迎は認めていません。

最近、登校時の敷地内までの車による送迎が多くなりました。正門は、子どもたちの通学路でもあります。子どもたちの安全な登下校のためにも、不必要な敷地内までの車による送迎はご遠慮願います。また、正門付近の契約駐車場の利用も、地域の方の迷惑になります。

どうぞ、ご理解いただきますようお願いいたします。



## 「スマホ脳」①

「スマホ脳」という言葉をご存じでしょうか？

某テレビ番組でも取り上げられていましたが、スマートフォンを所持することで集中力や睡眠時間が減少するなど、脳への影響があるという内容です。

アンデシュ・ハンセン著の「スマホ脳」には、そうした弊害が具体的に示されています。ここで確認したいことは、大人が使用するスマホ等のデジタル機器の影響と、子どもが使用するスマホ等のデジタル機器の影響には明らかな違いがあるということです。これからこの学校だよりを通して、複数回にわたり情報をお伝えしたいと考えています。一緒に考えてもらえると嬉しいです。

【IT 企業トップは子どもにスマホを与えない？】

アップル社創業者のスティーブ・ジョブズ氏のエピソードです。

ある記者が、ジョブズの自宅について「スクリーンや iPad で溢れているんでしょうね？」と尋ねると、「iPad はそばに置くことすらしない。そして、使用する時間は厳しく制限している。」と答えたそうです。スウェーデンでは、2～3歳の子どものうち、3人に1人が毎日タブレットを使用しているというデータがあるのですが、同じスウェーデン出身のジョブズは10代の子どものには、タブレットを使う時間を厳しく制限していたのです。

ジョブズは、テクノロジーの開発だけでなく、それが私たちに与える影響についても、すでに知っていたのかもしれない。

## 《校長室散歩道 R4 版 No. 9》

自然災害に対する避難への備えは、まずその心持が大切と言われます。

東日本大震災を経験し、その後「小さな命の意味を考える会」NPO 法人を立ち上げた佐藤敏郎氏のコラムを目にしました。佐藤氏は宮城県の中学校教師で、自身も震災で次女を亡くしています。

「大川小に限らず、あの日津波から逃げて助かった人は、『念のため』に行動した人です。見えないし遠いけれど、誰も逃げないけれど『念のため』に逃げました。命を災害から守るのは『念のためのギア』です。大人のギアは子どもより一段も二段も早く高く入れられるように準備すべきです。子どもの『命を守る』とは、『命を輝かせる』ことです。」

「どうせ何もなし」と大人は何もなかった経験から言いがちですが、「何もない」ことを良しとすること、「念のため」と行動することの意味を改めて考えなければと思います。